

## 八戸の「コイツミヤクモ」

広瀬朝光

私が『小泉八雲論<sup>資料と</sup>研究と』（笠間書院、昭和五十一年十二月）を刊行して以来、既に四年の月日が経過している。その間、近世文学関係の仕事に追われて、この作者の研究に励み、しかも原稿を執筆するという機会を得なかった。今回、日頃敬愛する草間俊一先生の御退官記念の論文集に拙稿を寄稿する所以は、先生の御専門が主として東北地方の歴史・考古学の研究に重点を置かれている事実と、決して無関係ではない。それは、この原稿執筆の動機が、青森県八戸市立図書館所蔵の文献調査に<sup>(1)</sup>、誘われるままに自ら参加した事情に端を発しているからである。その折、この調査に当初より参画していた東北大学の佐藤武義氏は、八戸市立図書館の未整理資料の中に、「コイツミヤクモ」と片仮名書きの表題の付いたスクラップ・ブック（切り抜き帳）の存在する事実を、私に教えて下さったのである。

最初、私は小泉八雲に関連のある島根県の松江市ならいざ知らず、青森県の八戸市ではどうせたいした資料ではあるまいと高を括っていた。八戸市立図書館の調査に二度目<sup>(2)</sup>に訪れた際、私は思い直して先輩の佐藤氏の折角の御厚意を無にするのは失礼に当ると反省し、その資料をコピーに撮ってもらい、自宅に持ち帰った。その後の一年間、私は大学の補導の仕事で忙しく、精神的に余裕が持てないまま、無駄な時を過ごしてしまった。本年の四月になって、或る日、思いつくままに、「コイツミヤクモ」のスクラップ・ブックを調べてみた。この資料は、小泉八雲宛の二通の書簡と新聞（『読売新聞』・『国民新聞』・『中外英字新聞』・『東京朝日新聞』）・雑誌（『太陽』・『早稲田学報』・『新人』・『思潮』）の切り抜きな

ど、約百五十頁から成っている。この資料を、一体、誰が何のために蒐集したのか、先ず第一に私はこの問題について素朴な疑問を抱いた。当初、私は小泉八雲の作品を愛読している読者、或は研究者のスクラップ・ブックかなとも推定してみた。ところが二通の書簡の内容に検討を加えてみると、この資料には、小泉八雲の家族、或は近親者でなければ所持し得ない要素が含まれており、何故に八戸市立図書館に斯<sup>か</sup>かる資料が存在するのかにつき、にわかに興味を抱いて調査をする気になったのである。

## 二

さて、私のこの資料に対する第一の関心事は、墨筆で巻紙に書かれた二通の書簡を解読し、その内容を吟味する仕事に始まった。

第一の書簡は、浜口儀兵衛より小泉八雲宛になっており、封筒の裏面の住所・氏名により差出人は判明する。ただ残念なことには、封筒の表面を糊付けしているため、当時の日付を示す郵便局のスタンプ印、並びに表書きの住所・氏名が判然としない恨みがある。その文面は、左の通りである。(注)句読点は筆者が施した。

拝啓

此度ロンドンの日本協会の席上にて不思議の事にて、貴著 *Gleaning in Buddhist Field* の記事に依て、小生の亡祖父浜口梧陵の津浪当時の事蹟を発表せられ、為に一家の光栄を得たる事に御座候。就ては此の出来事の委細御談申上、御蔭にて此の如き光栄を荷ひたる事感謝申上度、明日手前御訪問可申上候に付、御面会の栄を賜り度、此段前以御願申上置候也。

七月十七日

頓首

小泉 八雲様

浜 口 儀兵衛

なお、封筒の裏面には、

七月十七日

京橋区巢地三丁目十五番地

浜 口 儀兵衛

と記されている。

右の書簡の差出人である浜口儀兵衛（山サ醤油醸造元）は、小泉八雲の著書 *Cleaning in Buddha-Field*（『仏の島の落穂』、明治三十年刊）に載る第一話 *A Living God*（生神）の主人公、祖父浜口梧陵の物語<sup>(3)</sup>によって、ロンドンの日本協会で自ら講演をした際に、その息子である事実が聴衆に知れ渡って、意外にも面目を施した一件を著者に報告すると共に、お礼のために面会を求めたのである。この間の事情については、田部隆次が既に『小泉八雲全集4』（第一書房 昭和三年）のあとがき（大正十五年十月）に

令息浜口担氏が英国留学当時、（ヘルン在世の頃）ロンドンの亜細亞協会で講演をした時、この文章を読んですでに浜口の名を知った多数の紳士淑女が、この講演者が浜口の令息である事を発見して、驚喜の余り、湧くやうな拍手と歓呼を贈ったので、浜口担氏も意外の面目を施したと云ふ礼状をヘルン家に送つて居る。

と書いている。浜口担氏は、父の浜口梧陵（七代目浜口儀兵衛）の死後（明治十八年、米国のニューヨークで没す、享年六十六歳）、後に八代目浜口儀兵衛を名乗った人物であり、書簡の差出人でもある。この書簡にある七月十七日の日付が、明治何年の出来事であったのかについては、今のところ不明であるが、明治三十年以降（『仏の島の落穂』刊行の年）の出来

事として推定する以外に方策はない。

第二の書簡は、京都の末慶寺住職和田準然より、小泉八雲に宛てられており、第一の書簡同様に、封筒の裏面により差出人の住所・氏名は判明するが、その表面を糊付して用紙に貼付けているために、住所並びに当時の日付を示す郵便局のスタンプ印は見られない。その文面は、左の通りである。なお、書簡の句読点は筆者が施した。

拜啓 時下雨気半に相向候処、御清要之条賀し上候。却説、過般は突然畠山<sup>。</sup>勇士<sup>。</sup>女史<sup>。</sup>之儀に付御手数煩し候段、謝し上候。其節御写真御分与之儀願上候処、複写致し候はゞ分与被致様之御文意に見読致候。御再写になり、頒与相叶事に候はゞ願度。実は先般申上候葡萄牙領事官モラエ君、来る五月三日当方へ外之三人同伴致し、畠山之墓へ参り度との書面只今着致候間、其節豫て称賛致居られ候故、ヘルン様之写真一覽に供し度候間、前記御承知被下御送附之段御依頼申上候。失敬の事申上候へ共、御入費は為御聞被下候はゞ、後して呈上致候。

草々

尚右モラエ様、勇士之肖像なり、猶墓所なり、右勇士に関する総ての写真を書物に、本国之葡萄牙国にて印刷なり、其書物も只今着致候。尤もヘルン様之勇士之説をも登載に相成居候。非常にヘルン様之説を大に称賛致有之候間、因に一寸申上候。

四月廿九日

和田準然

尚々御一報煩度候

なお、封筒の裏面には

京都市松原大宮西入西寺町末慶寺住

と書かれている。

和田準然とは、京都の末慶寺住職であり、この寺に畠山勇子の墓がある。一方、畠山勇子とは、千葉県長狭郡鴨川町出身の女性であり、明治二十四年に大津において、ロシアの皇太子が津田三蔵に刺されて負傷した事件を憂い、五月二十日の夕刻に、京都府庁の門前で自殺（剃刀で喉を突く）をした人物であった。その遺骸は、京都市松原大宮に在る末慶寺に埋葬され、彼女が死の直前に認めたロシアの大臣と日本の政府に宛てた二通の遺書は、後に府庁の門番所に届けられているのが判明した。小泉八雲は、わずか二十七歳の若さで、国事を憂えて自害をした日本女性の死に、不可思議なる感動を覚えたらしく、彼の著書 *Out of the East* (『東の国から』、明治二十八年)の最後の「一節として」、Yuko: a Reminiscence. (勇子—追懷談)を執筆しており、更に *Gleaning in Buddha-Field* (『仏の畠の落穂』、明治三十年)の第三話 *Notes of a Trip to Kyoto*. (京都紀行)においても、勇子の壮烈な死について触れている。

ところで第二の書簡の四月二十九日は、明治何年の出来事であつたらうか。スクラップ・ブックに載る新聞資料を調べてみると、明治二十八年十二月八日付の『読売新聞』の記事によると、小泉八雲 (Lafcadio Hearn) が京都の末慶寺を訪れて畠山勇子の墓参りをし、住職の和田準然に出会って、懇ろに物語をした話が載っている。

### ●多感時を愴むの士か

憶ふ昔四年前露国皇太子大津遭難の時一匹婦の身を以て国家の前途を憂ひ一篇の書を懐にして京都府庁の門前に詣り從容自刃したる千葉県人畠山勇子の墓は同地松原大宮西入る末慶寺に在り香花常に供すれども悲風凄雨恨殊うらみに深かりしが二三日前神戸下山手通六丁目に住む英国人ヘルンと云ふ人わざ／＼同女の墓を訪ひ住職和田準然師に逢ふて同女が日露兩國の平和を熱望の余り自殺したるは感心に堪へずなど懇に物語りつゝ香華料若干を供へて立帰りしといふヘルン氏亦多感時を愴むの士か

この新聞記事と第二の書簡とは、時間的にも妙に符合する個所がある。大胆な推量をするならば、『読売新聞』の記事(明治二十八年十二月八日)の出たその翌年(明治二十九年)の四月二十九日が、実際に書簡の書かれた年月日ではなからうか。それは書簡に載る「却説、過般は突然崑山。山。子。女。史。之。儀。に。付。御。手。数。煩。し。候。段、謝し上候」の個所にルビの付されている事実(ヘルンと普段あまりに会っていない関係なので、相手に記憶を呼び戻させようとしている。)並びに香華料(新聞記事参照のこと)の謝礼をしている事実などから、この新聞記事と第二の書簡とは密接な関連性を保つものと見做され、と同時にこの書簡は小泉八雲の神戸時代(明治二十七年十月〜明治二十九年八月二十日まで在住)に、和田準然が差し出したもの(新聞記事に「神戸下山手通六丁目に住む英国人ヘルンと云ふ人」とある。)と推定し得る。

この二通の書簡のうち、第一の書簡は明らかに小泉八雲の東京時代(明治二十九年八月〜明治三十七年九月二十六日)、第二の書簡は神戸時代のものである。これらが何故に八戸市立図書館に存在するのか、この素朴な疑問が、今回の研究調査の成果として、後に意味を持つてくるわけである。

### 三

八戸市立図書館蔵の資料「コイツミヤクモ」に載る新聞資料は、雑誌資料に比べて著しく少ない。新聞資料のうち、一番日付の古いのは、『山陰新聞』の明治二十四年十二月二十三日付の記事<sup>(4)</sup>。●故中学生の追悼式である。この記事には、ヘルン氏(小泉八雲の松江時代の新聞記事では、すべてこの呼称を用いている。)の名前は出ていない。それもその筈で、ヘルン氏は明治二十四年十一月十五日(日)に、熊本高等中学校(旧制熊本高等学校、後の第五高等学校)の教師になるために、松江を離任しており、既に熊本に在住していたのであった。その記事の内容は、松江尋常中学校の第四年級生徒横木富三郎、同三年級志田昌吉・妹尾丑之助三氏の追悼式の模様を伝えたニュースであった。ヘルン氏の松江離任の頃は、当時の『山陰新聞』の記事を調査してみると、コレラの流行していた事実が判明する。ヘルン氏の教えた生徒の死と葬儀の模様とを伝え

たこの新聞記事を、一体誰が熊本に送ったのであろうか。ヘルン氏の松江尋常中学校教諭時代の同僚であった西田千太郎の日記<sup>(5)</sup>には、

廿三日（時々雨霰）横木富三郎（四年級）、志田昌吉、妹尾丑之介（三年級）三子ハ共ニ中学校生徒中優秀ナル者ナリシガ、今秋以来相次デ死去セルニ付、教員生徒相謀リテ追悼会ヲ洞光寺ニ舉行ス。片山氏ノ祭文ハ数百人ヲシテ泣カシメタリ。教官中ニテハ中村、佐藤及三好ノ三氏斡旋ノ勞ヲ執レリ（予ノ出金五十錢及菓子料二十錢）。

とあるので、或は西田千太郎がヘルン氏に『山陰新聞』（明治二十四年十二月二十三日付記事）●故中学生の追悼式（を送り、教え子の葬式の模様を伝えたのかも知れない。この新聞記事が、何故に資料「コイツミヤクモ」の中に残っていたのか、誠に謎めいた話である。

年代順に資料を検討すると、次に古いものは既に指摘した『読売新聞』（明治二十八年十二月八日）●多感時を愴むの士か—の記事である。年月日未詳（明治三十七年一月下旬頃と推定）ながら、『国民新聞』に載った左の記事は、当時の文科大学生の声を代弁して余りあるものといえよう。

●小泉八雲任期 文科大学講師小泉八雲（本名ヘルン）の任期は近く八週間の後に盡くる事なるが文科大学にては近來外国教師掃蕩の方針を取り居る事として履継を為さざるべしとの噂あり、学生間には曩にリーズの解雇せられたる時と同じく不平の声甚だ高きよし、学問あり功勞ありて永く此土に留らんと欲する外国教師に対しては何とか優遇の道ありたきものなり

小泉八雲は、明治三十七年三月末日付をもって、文科大学講師の職を辞し、四月一日からは早稲田大学教授に就任しているが、この記事は文科大学の学生間に、彼の留任を望む声の多かつた事実をも反映している。彼は明治三十七年九月二十六日に狭心症のために死去した。享年五十五歳であった。八戸市立図書館蔵の資料「コイツミヤクモ」に載る新聞記事は、

何故か、殊に小泉八雲の死亡や葬儀の日取、或は追悼文などを多数収録しており、このスクラップ・ブック（切り抜き帳）が、八雲の近親者の手により蒐集された事情を物語っているかのようである。たとえば、一例を挙げてみると、小泉八雲の死亡、葬儀の日取を伝えるニュースは、次の如く記されている。

●小泉八雲氏逝く 早稲田大学教授小泉八雲氏は一昨夜晩餐後例の通り自宅の庭園を運動後胸部に苦痛を覚えしかば夫人に介抱せられて臥床に横はりたるが間もなく病症重大となりて遂に永眠したり、氏は夙に英国より本邦に帰化せし人にして（原姓ヘルン）学界に貢献する処多かりき、今や一朝其の訃を伝ふ最も惜しむべしとなす、因に記す、氏は最初より非常の日本贔負にして帰化せし際日本旧国は出雲なりとてこゝに八雲と改名したる由なるが、葬儀は来三十日大久保の自宅出棺特に仏式を以て之れを行ふといふ（『国民新聞』明治三十七年九月二十七日）

#### ●小泉八雲氏の葬儀

市ヶ谷富久町瘤寺にて一昨日世界的文豪小泉八雲（旧名ラフカデオ、ハーン）氏の葬式いと厳かに営まれたり。会葬者の中には早稲田大学の諸教授の外某々の西洋紳士七八名、又坪井文科大学長等も見受けたるが其帝国大学生は何故にか甚だ少なく他の数百名は早稲田大学生諸君にて其学生総代の祭文朗読もあり甚だ盛んなりき。而して梅法学博士は遺族の後見をなし、八雲氏長男一雄君を卒めて会葬者に挨拶せり。故八雲氏は享年五十有四歳、法名は静心院法誉八雲居士、遺族は未亡夫人と十二三歳を首に男子三人あり、長男一雄の名は父君の名ラフカデオより案出せられしものなりと云ふ。かの「小公子」（若松賤子の訳本にある）を聯想せしむるいと愛らしき子におはすと誰も見とれたり。又末子四五歳と見ゆるが其母なる人と棺前に焼香せられしとき、母君は沈散涙せきあえず、かの坊ツちやまは秋風の紅葉なす手を誰が教へけん、うつゝなくかき合はされしを見たる会葬の衆は皆顔を掩うて咽ばざる者なかりき。『……南無不可思議コウ……』此観音経は八雲居士が始めて日本に來られし時、ホーソルン全集と共に只二つありて三つとはなき友とせられし平常愛誦の経なりと聞く。（以下略す）（『朝日新聞』明治三十七年九月二十八日）



●小泉八雲氏 旧名をラフカデオ、ハーンといひ英国に生れ我国に帰化したる人なり嚮に帝国大学に教師たりしが後早稲田大学講師となれり去二十六日心臓破裂、大久保の邸に逝く（掲載誌未詳）

●小泉八雲氏の死去 早稲田大学講師小泉八雲氏（旧名ラフカデオハーン）は去る二十六日病死したるを以て本日下午一時牛込区市ヶ谷富久町通称コブ寺に於て葬儀を執行するといふ（掲載紙未詳）

▲小泉 八雲曾て大学教授として功多し今溘然逝く我文学界は此人を銘記す可き者也（掲載紙未詳）

●小泉八雲氏葬儀 卅日午後一時半大久保の自邸出棺壙寺に於て仏式により宮まる会葬者は主として故教授の親戚及び親友にしてフアーデル教授元米國海軍主計監マクドナルド・ミツチエル、坪内博士、雨森信成氏等あり遺骸は直ちに火葬に附し更に一日雑司ヶ谷墓地に埋葬せり棺前に備へられたる花環中故文豪の教授を受けたる諸氏より左の文を附して送りたるものあり曰く

其筆や戦勝国民の剣よりも重き故ラフイカデオ、ヘルン教授紀念の爲めに之を呈す故教授は其国民を愛し其間に住し又同国民も彼れを其市民として有したること最重の名譽とすべかりしなり而して今や亡し惜哉

（『国民新聞』明治三十七年十月一日）

このように、同一内容の新聞記事がいくつもスクラップ・ブックに貼り付けられている事実は、その作業をした人物が小泉八雲の死去を惜しむ気持ちから出た所為と考えられる。一体そういう仕事を為す人物は誰なのであるうか。私はその人物を小泉八雲夫人、即ち、節子未亡人の仕事ではなかったかと想像する。神戸時代・東京時代の小泉八雲宛書簡を所持できるのは、先ず第一に家族の者であり、第二に親戚・知人・教え子・研究者などの人物が想定される。しかし、書簡の推定年月日・『山陰新聞』の刊行年月日などから逆算してみると、矢張りこのスクラップ・ブックを編んだ人物は明治三十七年当時三十五歳であった節子夫人を想い浮べるのが、何かしら妥当のようにも思えるのである。

その他、新聞資料としては、『国民新聞』に載った追悼文、「我国に移植せし世界の名花―世界の文豪小泉八雲氏―(上)・(中)・(下)」<sup>(6)</sup>(明治三十七年九月二十九・三十日、及び十月一日)、「故ハーン氏」(翁湖生、明治三十七年十月、日未詳)、「小泉八雲紀念号を読む」<sup>(7)</sup>(河西璞、明治三十七年十月、日未詳)、「文婦小泉八雲氏」(明治三十七年十月、日未詳)、「小泉八雲氏の逸事」(文学博士 井上哲次郎君談、明治三十七年十月中旬、日未詳)、「テニソンに就て」<sup>(8)</sup>(夏目漱石談、明治四十二年八月六日)などがある。『朝日新聞』には、「◎小泉八雲の物故」(家庭今日の歴史(九年前の)九月廿六日)明治四十三年九月二十六日)、「小泉八雲」<sup>(ワトキンに)</sup> (家庭講 寄せた書面) (話資料 十五日の) 五月廿三日)、「柴漬」<sup>(柴漬)</sup> (明治四十三年一月七日)、「何時迄草」(刊年未詳)、「柴漬」(明治四十三年四月十四日)、「旧友の跡を偲びて」―ウエットモーア女史、ハーン未亡人を訪ふ―(明治四十四年四月十一日)、他に、『読売新聞』に、「ロチの悲み」<sup>(アナトール・フランス、中村星湖 訳)</sup> (明治四十四年一月八日)が掲載されている。結局、この新聞資料は、明治二十四年十二月以降、明治四十四年一月にかけての記事が収載されているわけで、殊に小泉八雲の逝去並びに葬儀の様、或はその追悼文が懇切丁寧に保存されているのが目につくのである。

#### 四

次に雑誌資料について、簡潔に記して置きたい。雑誌資料は断片的に切り抜いてスクラップ・ブックに貼付けているために、往々にして掲載年月日の不明瞭なものが多々現われる。年月日の推定し得る資料としては、「故小泉八雲先生」(『芸苑』、明治三十七年十月、内ヶ崎作三郎氏談)、「小泉八雲先生を追懐す」(『早稲田学報』第百八号、明治三十七年十月、内ヶ崎作三郎)、「帝国文学『小泉号』」・「小泉八雲氏の『日本』」(『英文新誌』―雑報、明治三十七年十月)、「嗚呼野の人」―彼れが追懐と彼れの遺志―(『太陽』、明治四十二年十二月、第拾五卷拾貳号、姉崎正治)、「小泉八雲の怪談を読む」(『新人』、明治三十八年一月、第六卷第壹号、鼎浦生)、「在米時代の小泉八雲先生」(『思潮』、明治四十四年?) 内ヶ崎作三郎)、「大郊秋色」―小泉八雲先生追憶譚―其一、上田文学士談話、其二、井上博士談話、小泉八雲氏の墓―『The English World』

VOL. XIII No. 15. 明治三十八年三月)、「小泉八雲氏に関する回想録」(『中外英字新聞』、明治三十七年十月、磯辺弥一郎)、「ラフカデオ・ハルン氏隱岐紀行」、『中外英字新聞』、明治四十一年八月、岡村愛蔵氏訳)などがあり、他に「文界漫步」—文豪小泉八雲氏と外国新聞—(混世)・「耳無し法一(上)」(莫愁生)(雑誌名・刊年未詳)、「灰色の静謐」(雑誌名・刊年未詳、野口米次郎)、「チェンバレン教授の談片」(『英語青年』、刊年未詳)がある。

これらの資料には長文のものが多く、ここに一々紹介できないのが残念であるが、この雑誌資料も、また小泉八雲逝去の折の追悼文、或は回想録等から成り、しかも明治三十七年以降、明治四十四年にかけての資料が殆どであり、これは新聞資料と軌を一にする資料蒐集の方針になっている。

先に挙げた雑誌資料のうち、「チェンバレン教授の談片」には、小泉八雲について触れている個所がある。

旅行が昔から好きで方々歩いてゐますが、英国は元より独逸でも仏蘭西でも此頃は到る所故 Lafcadio Herne 氏の評判が大変なものです。ハーン氏は実に惜しい事をしました。今度ハーン氏が私に宛てた手紙が本になりました。

あの二冊物の書簡集とは別です。あの中にも私への手紙は大分入つて居りますが、当時調べて見て如何も不足するやうに思ひましたが、其後古行李の中から百通ほど出た。其の中から抜いて今度本にしました。版權ですか、それはハーン未亡人に与へました。此秋は今迄の書簡集に今度の私へのを加へ、それに御承知でせうメースン氏、あの人への手紙も加へて大成したハーン書簡集が出る筈です。ハーン氏は書簡作家としては英文学に於て昔から五人か六人と云はれる其の一人です。例へばワルポールとかバイロンとかあんな人と比肩すべき名作家でした。

右の引用文の傍線箇所は、資料を蒐集した人物がインクで傍線を施した部分である。チェンバレン教授の談話によると、その内容は小泉八雲の死後の出来事である。この傍線を施した人物が誰であるのかは判然としないが、小泉八雲の文筆家としての名声を誇る意図から斯かる行為をした事實は明らかであろう。

書簡・新聞・雑誌の順に調査を進めて見ると、八戸市立図書館蔵の「コイツミヤクモ」には、いくつかの疑問点が出てく

る。第一にこの資料が何故に八戸市立図書館に存在するのか、その入手経路を調査する必要がある、第二に資料の蒐集者が誰であるのかを確認しなければならぬ。この作業を完成するために、私は本年六月の或る晴れた日に、八戸市立図書館を訪れたのであった。これ以降は、その顛末記である。

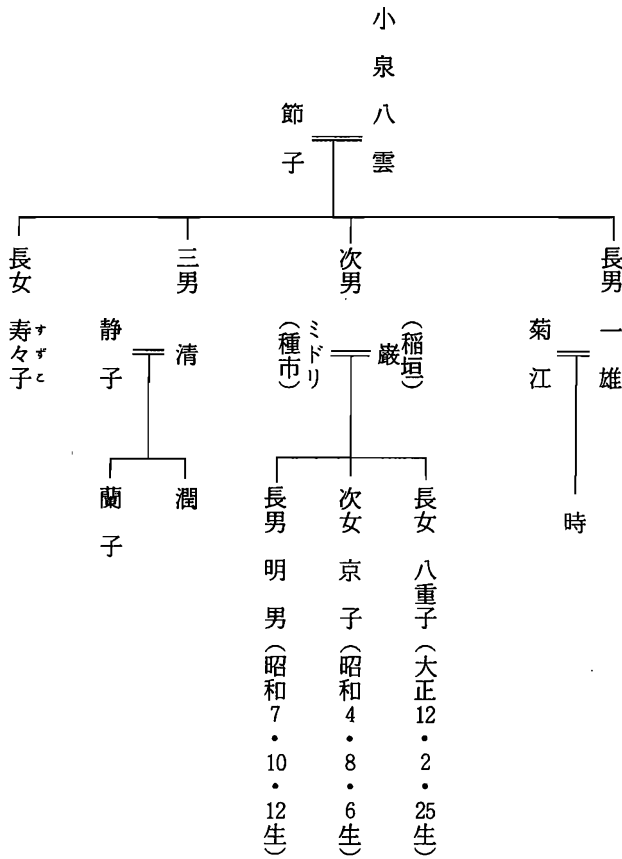
## 五

私は八戸市立図書館において、図書館長西村氏<sup>(9)</sup>、係長小笠原氏の二人に面会し、八戸市立図書館蔵の資料「コイツミヤクモ」の出所並びに入手経路についての説明方をお願いした。西村館長の話によると、文豪小泉八雲の次男稲垣(母方の姓を継ぐ)巖氏の妻ミドリ<sup>(11)</sup>(旧姓種市)<sup>(12)</sup>氏は八戸市出身の方であり、夫巖氏の死後(昭和十二年八月十五日没、享年四十歳、多摩墓地に葬る)に八戸市の実家に戻られた由である。或は種市家の屑物として出された「コイツミヤクモ」の資料が、何等かの経路を経て八戸市立図書館に紛れ込んだに違いないが、いずれにしても小泉八雲の親族から出た資料である事実には間違いないとお話であった。西川氏の話聞いて、私は書簡・新聞・雑誌の調査を通じて得た結論が、偶然にも一致した事実に驚いた。島根県松江市出身の武士の末裔が、八戸市に在住して、しかも松江から盛岡に転出して来た筆者が、この東北の辺境において再び小泉八雲関係の文献調査に従事するとは、まさに奇遇でさえある。西川氏は、稲垣氏の長女八重子氏とは旧知の間柄だそうで、種市家関係の系図を書き示しながら、現在八重子氏が図書館の近くに住んで居られる旨、私に教へて下さった。

九月に入り、私は八戸市で稲垣姓を名乗る家に片端から電話を掛けて、稲垣八重子氏の存在を確認しようと試みた。その結果、稲垣寛氏(八戸市売市下久根一八一—一三)夫人八重子氏の所在を確かめ得たのである。十月上旬に、私は稲垣氏宅を訪れ、小泉八雲の孫八重子氏に直接的に会える機会に恵まれた。

八重子氏は、その横顔、特に鼻筋が文豪小泉八雲に酷似しており、御本人のお話によると、祖母節子の初孫に当る関係上、

彼女の故郷島根県松江市に在る八重垣神社にまつわる伝説、即ち速須佐之男命が櫛名田比売を娶られた時に詠まれた「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を」(『古事記』上巻)の御歌に因んで、八重子と名付けられたという。彼女から頂戴した小泉家の系図は左の通りであり、現在は孫の時代になっており、依然として親戚付き合いをなさっている由である。



八戸市立図書館蔵の資料「コイツミヤクモ」について、稲垣八重子氏は全く心当りはないが、その昔親戚に荷物を預けていた時代もあるので、その時に屑物として処理されたスクラップ・ブックが、何等かの経路を経て図書館に入ったのでしようと言われ、また片仮名書きの下手糞な字体に関しては、自分の両親は達筆であったため、誰の字体なのかわからないものである。現在、稲垣氏宅には、小泉八雲関係の資料は何一つ存在していないが、弟の明男氏宅には若干資料が残っているから、機会があれば弟宅にお立寄り下さいとの助言をいただいた。稲垣明男氏は、私と同窓であり、東北大学経済学部卒業後、川崎製鉄に入社し、現在その系列会社である晴海工業株式会社（東京・万世橋附近）の部長をしておられ、なお奇妙なことには、岩手大学学長原田三郎先生が東北大学経済学部教授であられた折に、稲垣明男氏は原田ゼミに所属していたという。人生将に奇々怪々、人間万事塞翁が馬とは此の事、早速、岩手大学人文社会科学部教授奥泉清先生の紹介状を持参して、稲垣氏を訪れることに相成った。先方の御都合もあるので、訪問は多分次年度になるであろう。稲垣明男氏からは、「新しい資料といえるものは何もなく、既に人に知られたものしかない。」との電話連絡を受けているので、私としてもあまり期待しているわけではない。ただ文豪小泉八雲の形骸に触れてみたいと願うのみである。

## 六

斯くして、八戸市立図書館蔵の資料「コイツミヤクモ」は、小泉八雲の次男稲垣巖氏宅より出たスクラップ・ブックである事実が判明した。この資料の蒐集者は、既に指摘したように、多分、小泉節子夫人であろう。この資料は小泉八雲研究者にとって、いわば二次的な文献にすぎないが、当時の文壇の動向を知る客観的な価値判断を示す証拠物件としての意義を帯びており、今後これらの資料の整備が望まれる。私も機会があれば、今後このような二次的な文献の整理整頓に務め、小泉八雲研究の一助としての捨石の役割を果たしたいものである。

最初にも触れておいたが、拙稿は草間俊一先生の御退官記念論文集に寄稿するために執筆したもので、地方史開発の意味

合いを込めている。この拙い論考が、草間先生との四年間の御好誼を温めてくれる証となることを願いながら擲筆とする。

昭和五十五年十一月十日

註

- (1) 昭和五十三年十月、東北大学片野達郎・松野陽一・佐藤武義・宮城教育大学金沢規雄・岩手大学原田貞義の諸氏と共に、八戸市立図書館蔵の蔵書目録を作成する仕事に参加。
- (2) 昭和五十三年十一月。
- (3) 安政元年十一月五日に、津浪が紀州広村を襲った際、浜口梧陵（七代目浜口儀兵衛）は稲束に火を放ち、村人達に急を知らせ、小高い丘に避難させ、多数の人々の生命を救った。
- (4) ●故中学生の追悼式  
豫記の如く昨日午後二時、尋常中学校の故第四年級生徒横木富三郎同三年志田昌吉、妹尾丑之助三氏の追悼式を松江分洞光寺に施行す会する者二百余名來賓には斎藤師範学校長以下職員及死者の親戚にして僧侶廿余名仏式を営み終りて中学校長木村牧氏片山教諭の祭文奉読次で五年級総代遠藤静衛四年級総代三浦倫吉三年級総代外山林次郎二年級総代錦織甚六同窓学会総代内田実神門輔仁会総代今岡義一郎諸氏の祭文奉読あり次で参拜者一同へ茶菓を供し散会せるは午後五時なりし中にも片山氏の祭文奉読中は何れも悼涙を流さざるは無かりきと（以下、長文ゆえ略す）
- (5) 『西田千太郎日記』全一卷（島根郷土資料刊行会、昭和五十一年六月）
- (6) 拙著『小泉八雲論研究』（笠立閣書院）第三章 新資料による小泉八雲の研究―所載『山陰新聞』（明治二十五年三月）明治三十七年十月）、資料⑧・⑨・⑩に全文を掲げてある。但し、『山陰新聞』の記事は、『国民新聞』の記事を買って転載したものでらしく、「我国に移植せし世界の名花」の見出しを省き、内容も若干書き変えてある。従ってこの記事の発表年月日は、『山陰新聞』にあつては、明治三十七年十月四日（火）・五日（水）・六日（木）の三日間の連載となつており、『国民新聞』の記事の発表年月日より、約五日の遅延ニュースと化している。
- (7) 明治三十七年十月発刊の『帝国文学』の書評
- (8) 漱石はこの記事の中で、「詩許りで無く散文でも調子は解しにくいけれども、散文の方が私には解しやすい。十九世紀の文章家としてはドクインセー、ウォルター・ペーター、ステイウンソン、キップリング等は主なるものである。其他にも此間死んだ

ハーンさんだとか、ラスキンだとか其他散文の大家として有名な人は幾らでもある……（以下、略す。）と述べている。

- (9) 八戸市立図書館長西村嘉
- (10) 八戸市立図書館資料係長小笠原忠雄
- (11) 稲垣巖（明治三十年二月十五日生 昭和十二年八月十五日没）
- (12) 稲垣ミドリ（明治三十一年九月十三日生 昭和五十三年三月二十五日没）
- (13) 横浜市金沢区六浦町一三九七、六浦台地四ノ一〇三に在住。
- (14) 昭和六年生れ、経済学博士。東北大学経済学部在学中、原田ゼミに所属し、稲垣明男氏の一年先輩に当る。